



Title	志賀直哉の大正時代の作品研究：〈自己〉と〈他者〉を中心に
Author(s)	Mohammad, Moinuddin
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/60053
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【13】

氏 名	モハムマド モインウッディン MD, MOINUDDIN (Mohammad Moinuddin)
博士の専攻分野の名称	博 士 (文学)
学 位 記 番 号	第 2 6 0 5 6 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 25 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	志賀直哉の大正時代の作品研究 ―〈自己〉と〈他者〉を中心に―
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 出原 隆俊 (副査) 教 授 飯倉 洋一 教 授 清水 康次

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、「他者」が描かれず、思想性や社会性に欠けるとされる志賀直哉の作品について、代表作といわれるもの以外についてみれば、必ずしも「他者」が描かれないわけではないという立場から、代表作が発表された大正期の作品を対象に、〈自己〉だけでなく〈他者〉という切り口も重視して、代表作も含めて新たな読み方を提示しようとするものである。

「第一章『大津順吉』論—「私」をめぐる—」では、キリスト教の姦淫を禁じる教えに従おうとする理性と、女性への欲望のはざままで苦しんでいる「私」の心理の動きを追う。そのために取り分けて二人の女性との関係の変遷を跡付け、信仰からの離脱の経緯を確認する。あいまいなままに途絶えた一人と理想には合わない関係を深めようとするもう一人との係わりを浮き上がらせる。その中で家族や女性よりも自分中心の態度が突出しているとする。その一方で友人への信頼が見られると指摘する。

「第二章『和解』における〈自己〉—父子関係を中心に—」では、父子の不和には双方の自己中心的な姿勢が要因であるとし、それに対して和解へと向かう過程では、従来指摘されている次女の誕生のほか、友人の役割や、ある人物の創作「或る親子」が、調和を生む契機になっているとして、〈自己〉を離れて〈他者〉へと視野を広げていくさまが確認されるとする。

「第三章『十一月三日午後の事』論—〈他者〉への視点をめぐって—」では、反軍国主義という視点で読まれてきたこの作品について、天候など周囲の不快な状態の中で外出し、当初は心情に変化がなかったが、「一年志願兵」の悲惨な状況を目にした後、心をかき乱され、〈他者〉に心を向けるようになった経緯が描かれる作品であるとした。

「第四章『流行感冒』論—〈自己〉と〈他者〉を中心に—」は、流行感冒について子供への心配から神経質になり、「女中」である石への不信から強い他者性を感じていた「私」が、自身も感冒にかかるなどする中で、献身的に働く石の姿を見て、〈他者〉への視点が大きく変化して、石に一人の〈他者〉としての存在の意味があることを理解するようになると指摘する。

論文審査の結果の要旨

本論文は、従来、主人公の〈自己〉という問題に終始していた議論に対して、代表作以外を見れば、必ずしもそれだけでは片づけられず、〈他者〉の問題も重要であると提起する。その視点から、代表作である『和解』についても、これまでに注目されてこなかった部分に視点を当て、新たな読みの可能性を提起しようとした。その試みの姿勢は十分に評価されてよい。また、こうした問題意識から、あまり重要視されなかった作品にも目を向け、〈他者〉の問題に多角的に接近しようとしたことも意義のあるところである。

第一章・第二章の時間関係の分析の試みもそれなりの努力の跡が見られ、第三章の天候などの外界の状況への注目や、第四章の石という小娘の存在への視線もそれなりの有効性が評価できる。これらが意外に重要な作品である事を示した点は成果であるといえる

その一方で、〈自己〉と〈他者〉という視点を立てているのに、定義や論理的整合性に不備がある。〈他者〉ということをめぐる幾つかの見解が紹介されているが、こうしたことに関する現在の研究の水準からは不十分である。複雑な時間構成に着目しながら、その意味を自分なりに究明できていない点など、せつかくの着目や分析の努力が生かし切れてい

ない。第一章・第二章の途中の論述は丁寧であるが、肝心の結論部分の論述が平凡なものにとどまっているという印象はぬぐい難く、何のための〈自己〉と〈他者〉という問題設定なのかという本質的なものにつながる疑問を抱かせることは否定できない。第一章では「大津順吉」というタイトルにこだわっているが、語り手である主人公の名がタイトルとなっていることの意味は、〈自己〉と〈他者〉という問題設定に関わるとも思われるが追求がないまま放置されている。また、この作品のあいまいに終わっている個所があることを指摘している。その部分に切り込んで読解を深めることも可能であったと思われるが、言及のみにとどまっており、具体的な考察がない。

また、全体を通して、作品と作者を切り離すと宣言しつつも、実際のアプローチにおいては、その問題を十分にこなしているとは言えない。むしろ、最初の問題意識が、実質的には希薄になっていると言わざるを得ない。

このように、本論文は、弱点を少なからず残していることは否定できない事実であり、より充実したものへと進化することが強く求められていると言えよう。そのように指摘したうえで、今後のさらなる精進を強く期待し、本論文を博士(文学)の学位に認定できるものと判断する。